

第4回 ESD ティーチャーフォローアップ研修 概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

◇開催日時 2021年11月2日(火) 19時～21時

◇方法 ZOOM を用いたオンライン研修

◇参加者数 14名

◇内容

総合的な学習の時間「BIWAKO TIME」：滋賀大学附属中学校：永田 郁子先生

1. 滋賀大附中の BIWAKO TIME について

- ・35年間、継続されている学習
- ・生徒の興味関心をもとに作成した3学年合同のベースルーム
- ・ベースルームから少人数のグループに分かれ、生徒自身が立てた「問い」を土台とした滋賀県に関することをテーマに、研究に約半年間をかける学習活動。
- ・アンケートを行ったところ、BIWAKO TIME に対して重要性を感じている生徒は少なく、マンネリ化しており、意欲的に取り組んでいるという状況ではないことが明らかになった。
- ・生徒の主体性を引き出すために、「問い」を立てることを大事にすることとした。
- ・グループの研究成果をSDGs（持続可能な開発目標）の17のゴールのいずれかと関連させる。
- ・「なぜ〇〇は△△なのか?」「〇〇はほんとうに△△なのか?」といった「問い」から出発し、調査研究を経て「〇〇を▲▲するにはどうすればよいか?」といった課題解決型の「問い」に更新させる。

・学習の構成

①ガイダンスを行ったのち、テーマ別に14のベースルームを提示し、希望制でベースルームへの所属を決める。

②個人研究：「しが統計ハンドブック」より関心のあるテーマを3つ選ばせる

滋賀県が目立っているデータに着目するよう伝える。

各自がインターネット等を活用した調査研究し、統計レポートを作成する。

統計レポート作成時の指導内容

- ・「問い」をもとにして調査し、論拠として統計資料を2つ以上用いること。
- ・自分が立てた「問い」に対して、「仮説」を立てながら調査し、その結果をまとめること。

③レポートの交流

④グループ研究

レポート交流から、具体的テーマに即したグループをつくらせたところ、72グループが編成された。思考ツール（ピラミッドストラクチャー）を用いる。論拠となる資料がそろわない場合は、やり直させるなど、ベースルーム内で個別に指導する。

・成果と課題

統計資料の活用からスタートすることで、研究はうまく進むが、行動化にはいたらないという、ESDとしては弱さがあった。本当は、日常的に探究のネタを見出させ、研究をスタートさせることが理想だと感じている。

2. 本実践に対する意見交流

・「問い」の交流について

問いの洗練化：問いを交流することで、本当に探究しがいのある問いが見つかるだろう。

独自性の発見：交流することで、個性的な問いであることに気づき、それは意欲につながるだろう。

問いの変容：問いの変容に着目することで、研究計画に対する見通しが持てるだろう。

- ・異学年による縦割りの学びについて

異学年の学び合いによって、生徒のモチベーションが向上すると思われる。

いつもとは違うメンバーによる学び合いで、多様な見方・考え方に接することができたのではないか。

生徒の発達には、学年でくることができない面がある。各学年の目標を立てているが、それをもとに個人着目したルーブリックを作成し、評価に生かした。

- ・グループでの学びについて

個人研究からスタートし、グループ研究といっても机上の研究に終始している。グループでフィールドワークを行うなどの体験的な学習を取り入れ、共通体験を踏まえると、学びが深まるのではないか。

- ・行動化を促すために

「人との出会い」が重要であろう。出会った人物への共感（あこがれ）は行動化につながりやすい。人物にもよるが、一般的でない見方にふれることで、多様な見方に気づく機会となる。

地域資源の開発により、生徒の切実感がまし、教材が生徒の心にうったえかけることで、学びが主体的になるとともに、学習成果としての行動化を引き出しやすいのではないか。